

千二百羅漢像

愛宕念仏寺の最も際立った特徴の 1 つは、境内じゅうに置かれている 1200 体の表情豊かな石像です。石像は、仏法と仏の教えの真理を理解し悟りを開いた人物であるアラハン（日本語で羅漢）を表すものです。仏教の美術や物語において羅漢は、ガウタマ・シッダールタ（歴史上の仏陀、紀元前 5 世紀から 4 世紀頃）が完全な涅槃に達したとき、彼の臨終に立ち会ったと言われる五百羅漢のように、特定の人数の集団としてしばしば表現されます。

愛宕念仏寺は 1981 年に、寺院の大規模改修と並行して、信者の支持を集めるため 5 年をかけて 500 体の羅漢像を作る事業を始めました。参加者は日本全国からやって来て、住職の西村公朝の指導のもとで石彫の基本を学び、境内で石像を彫りました。当初の 500 体の像を作るという目標は 5 年ではなく 1 年以内に達成されましたが、応募はあらゆる地域から殺到し続けました。これらの希望に応えるため、愛宕念仏寺がさらに 700 体の羅漢像を安置することにした結果、石像は 10 年間で合計 1200 体になりました。2 回目の募集で作られた石像は、境内の使える空間を最大限活用するため、より小さくなっています。

参加者にはそれぞれ、愛する人への供養、信心の表現、または自身が生きた証など、羅漢像を彫る個人的な動機がありました。公朝の励ましもあって、奉納者たちが心と魂を自身の羅漢像に注ぎ込んだ結果、多様なデザインと表現が生まれました。羅漢像の中には深い祈りのポーズを取るものや、楽しそうな笑顔を見せるものもありますが、多くの像はお気に入りの動物やスポーツ用品、あるいはカメラやカセットプレーヤーといった現代的な機器まで、奉納者または石像のインスピレーションの元となった人にとって特別な意味を持つ物品を持っています。

ほんの数十年前で愛宕念仏寺の羅漢像は苔で覆われてしまったため、今では何世紀にもわたって山の風景の一部であったかのように見えます。これらの石像は、特にそれらを取り囲むモミジの葉がとりわけ鮮やかになる春と秋に、多くの参拝者をこの寺院に引き付けます。